コロナ禍での音楽分野の「やりくり」授業
～「楽譜を読む力（知覚）」が感受に与える影響Ⅱ～

横地美奈
鳥取大学附属中学校　音楽科分野
E-mail: yokoji-m@tottori-u.ac.jp

Mina Yokoji（Tottori University Junior High School）: **Classes in the music field under the COVID-19 related crisis. — Effect of "ability to read music scores (perception)" to sensitivity. (part II).**

要旨 ― 昨年はコロナ対策と同時進行で「できること」が絞られ，限られた条件の中で授業を行なった。今年も引き続き，歌唱，器楽（アルトリコーダー）が少なくなった分，「楽譜を読む」ことを積極的に取り入れた。更に，今年の２，３年生は今までの知識をもとに楽譜から曲想を感じ取り，それをどう表現するか考えさせた。本校の目指している「やりくり授業」は，「やりくりをするための素材をたくさん与えるほど，個性的で豊かなものになる」と自分は考える。その素材を「楽譜を読む」ための知識とし，楽譜を読むことで楽曲理解を深め，それが表現力にどう影響を与えるかを研究することにした。楽譜を読みとることで，作曲者からのメッセージを想像し，「より豊かな表現」になるのではないかと推測し，昨年と今年のアンケートをもとに，音楽への意欲や表現にどう変化が出たか検証してみることにした。

キーワード ― コロナ対策，問題解決，試行錯誤，読譜

Abstract ― Last year, the number of things we could do in the school was limited because of the confines coming from the Covid-19 countermeasures, and we have to conduct classes under limited conditions. The number of classes for singing and playing music instrument (alto recorder) was forced to be reduced also in this year, so, instead of those, I actively introduced "reading music scores" in the music classes. In addition, I tried to ask 2nd and 3rd graders thinking about how to express themselves by sensing the idea of the music from the score based on their previous knowledge. I believe that the more materials were provided, students sensitivity becomes unique and richer. Thus, I studied how reading music scores deepens the understanding of music and how it affects the ability to express oneself by providing materials as knowledge for reading music scores. Based on the questionnaires made last year and this year, I examined how the students' motivation for music and expression changed.

Key words ― Corona measures, problem solving, trial and error, reading

1. はじめに

本校に赴任して２年目となった。昨年は，赴任してすぐに休校になり，生徒の実態を知らないまま，コロナ対策に追われることになった。どこまで歌えるのか，リコーダーはどれだけ吹けるのか，楽譜はどこまで読めるのか，実態が全くわからないままコロナ対策をしながらの授業スタートとなり，暗中模索状態だった。なるべく飛沫が飛ばない授業として，２年生は「アイーダ」の鑑賞から始め，1，3 年生は楽譜の読み方を確認することにした。それまでは，楽譜を読むことに抵抗を覚える生徒もいて，耳から聴いた音をそのまま覚えて歌わせていた。しかし，楽譜が読めるようになれば，もっと音楽が楽しくなり，表現に深みが増すのではないかと思っていたので，このコロナ渦の時期に実践してみた。私自身，楽曲分析をしていくと，作曲者のメッセージに触れられ，読めば読むほど面白くなり，音楽が深みを増して彩り豊かに装飾されていくような気がしたからだ。もし，生徒達が自分で楽譜を読み取れるようになれば，私と同じような気持ちになり，もっと音楽を好きになるのではないかと考えた。音楽科教員として，地域の文化の発

展を担っていく生徒の育成は重要課題である。また，「音楽の楽しみ」を知ってこそ，人生をより豊かに生きていけることを伝えたいと思った。まずは，単純に「音楽って楽しい。」と思う生徒を増やすことを目標としている。昨年は，「楽譜が読めない」生徒が思った以上にいることに気付き，「楽譜が読めるようになることで，より音楽が楽しくなる」という仮説を立て，実践した。今年は 2 年目となり，昨年の授業がどう感じ方や表現に影響しているかを更に検証し，発展させ，感性をより豊かに磨き，豊かな表現ができる生徒の育成を目指したい。

〈昨年度の結果〉

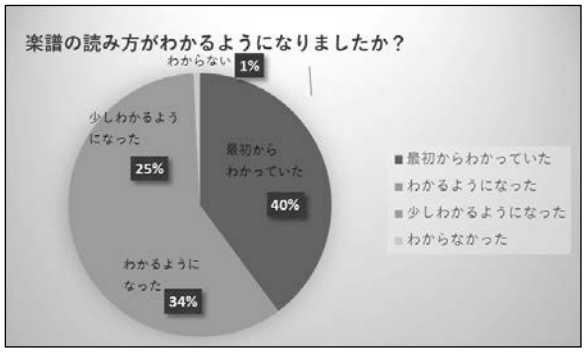


図 1　3 年生対象 131/136 名 2020 年月実施

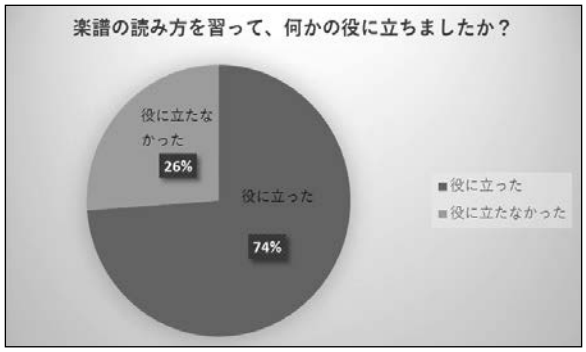


図 2　130/136 名回答 12 月実施

昨年，3 年生を対象にアンケートをした結果，最初は楽譜を読める生徒が約 40％だったが，学習後，もともとわかっていた生徒と合わせて 99％が多少は楽譜を読めるようになった（**図 1** より）。

そして，楽譜が読めることが役に立ち，音楽が楽しくなったという意見が数多く出ていた（**図 2**，**図 3(1)**，**図 3(2)**，感想より）。

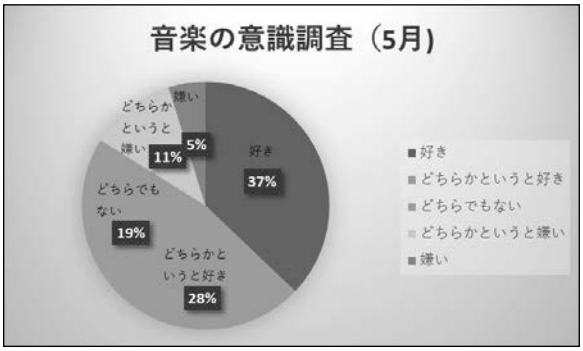


図 3(1) 2018 年度入学生徒対象　130/136 名
2020 年 5 月実施

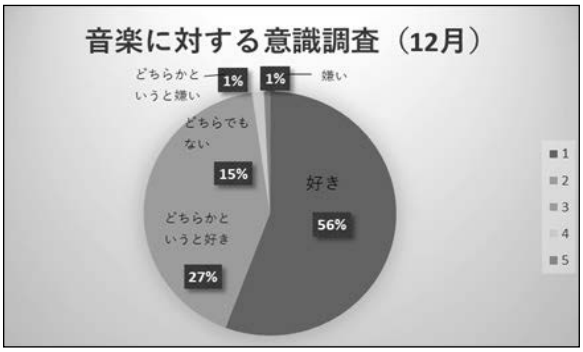
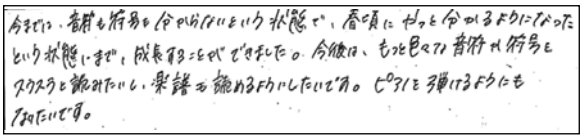
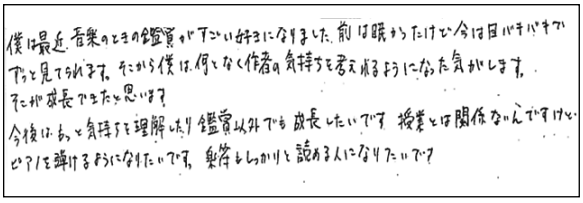


図 3(2) 2018 年度入学生徒対象　131/136 名
2020 年 12 月実施

〈感想より〉


今までは、音階も符号も全くわからないという状態で、音頃にやっと分かるようになったという状態にまで、成長することができました。今後は、もっと色々な音符や符号とスクスクと読めたいし、楽譜を読めるようにしたいです。ピアノを弾けるようにもなりたいです。


僕は最近、音楽のときの鑑賞がすごい好きになりました。前は眠かったけど今は目がキラキラすっと見てられます。だから僕は、何となく作者の気持ちを考えるようになった気がします。それが成長できたと思います。
今後は、もっと気持ちを理解したり鑑賞以外でも成長したいです。授業とは関係ないんですけど、ピアノを弾けるようになりたいです。楽譜をしっかりと読める人になりたいです。

〈今年度の実態〉

今年度の実態は，入学時の 1 年生は音楽の学習が「好き（39％）」，「どちらかというと好き（24％）」，「どちらでもない」（21％），どちらかというと嫌い（10％），「嫌い」（6％）となった（**図 4**）。2 年生は，昨年度のものと比較してみた。

〈2021 年度 1 年生〉

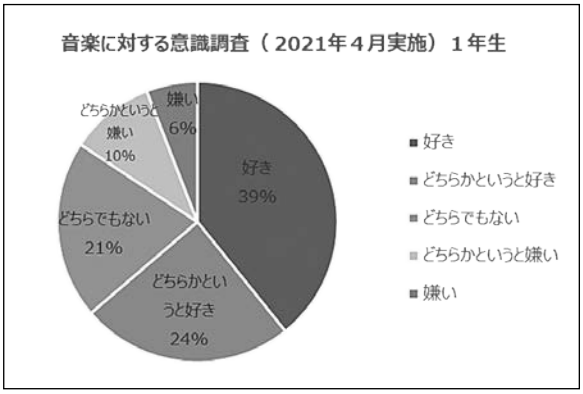


図 4 2021 年度入学生徒対象 137/139 名
2021 年 4 月実施

〈2021 年度 2 年生〉

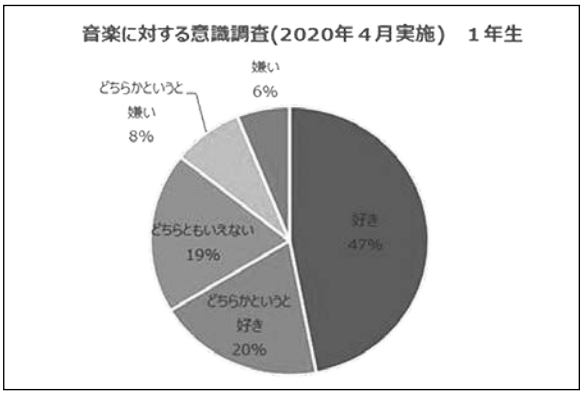


図 5　2020 年度入学生徒対象 134/139 名
2020 年 4 月実施

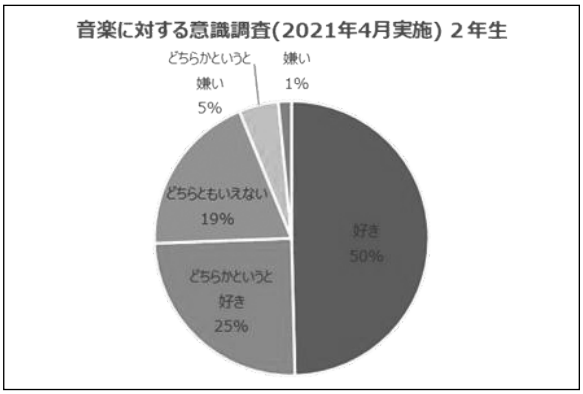


図 6　2020 年度入学生徒対象 131/138 名
2021 年 4 月実施

2 年生は，好き（47%→ 50%），どちらかというと好き（20%→ 25%），どちらでもない（19%→ 19%），どちらかというと嫌い→（8%→ 5%），嫌い（6%→ 1%）と変化し，昨年 1 年間で音楽が好きになった生徒が増えたことがわかった（**図 5，図 6**。）

続いて, 3 年生も昨年度のものと比較してみた。

〈2021 年度 3 年生〉

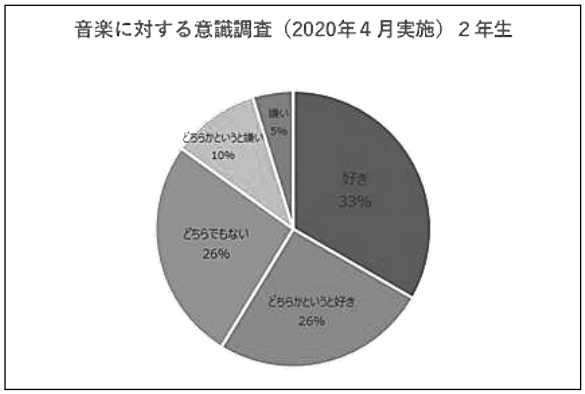


図 7　2019 年度入学生徒対象 126/134 名
2020 年 4 月実施

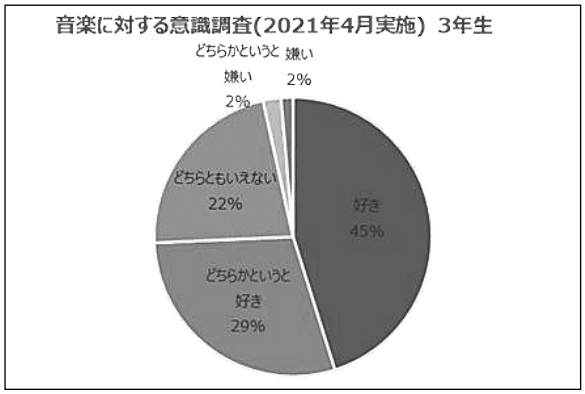


図 8　2019 年度入学対象 126/135 名
2021 年 4 月実施

3 年生は，好き（33%→ 45%），どちらかというと好き（26%→ 29%），どちらでもない（26%→ 22%），どちらかというと嫌い→（10%→ 2%），嫌い（5%→ 2%）と変化し，2 年生同様，昨年 1 年間で音楽が好きになった生徒が増えたことがわかった（**図 7，図 8**）。

何故，2，3 年生で音楽が好きな生徒が増えたのか，音楽が好きな生徒が増えると何につながっていくのか，楽譜を読む学習がそこにどう影響しているのか，調べてみたいと思った。

平成 29 年告示の中学校学習指導要領には，音楽科の目標として，(1)「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽的な見方・考え方を

働かせ，生活や社会の中の音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」というのが示されている。「音楽的な見方・考え方」というのは，「音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などと関連付けること」であると考えられる。「音楽に対する感性」とは，音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取る」ときの心の働きを意味している。音楽に対する感性を働かせることによって音楽科の学習は成立し，その学習を積み重ねることによって音楽に対する感性は豊かになっていく。「音や音楽を，音楽を形作っている要素とその働きの視点で捉え」は，音や音楽を捉える視点を示している。生徒が，音楽を形づくっている要素の知覚・感受を支えとして自ら音や音楽を捉えていくとき，生徒の音楽に対する感性が働く。したがって，音楽に対する感性を働かせることによって音楽科の学習は成立し，その学習を積み重ねることによって，音楽に対する感性は豊かになっていく。音楽科の学習では，このように音や音楽を捉えることが必要である。そして，その支えとなるのが従前の〔共通事項〕ア「音色，リズム，速度，旋律，テクスチュア，強弱，形式，構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること」である。（中学校学習指導要領　平成 29 年告示　より）

「楽譜が読めなくても音楽は楽しむことができる」という言葉を聞く。確かにそれは間違ってないと思う。聴く喜びも、奏でる、歌う喜びも、楽譜を読めなくても味わえる。では、楽譜が読めるようになると、どう音楽の楽しみ方が変わるのだろう。私は楽譜から「作曲者のメッセージ」を受け取ることができる、と考えている。創られた物には全て創った人の思いが込められている。それを読み解くことで、時代を超えて様々な思いに触れ、新たな楽しみも湧いてくるのではないか、そう思い、「読譜」の学習に改めて研究テーマとして取り組むことにした。

2. 研究の方法

昨年度は 3 年生を研究対象としたが，今年度は全学年で年度当初にアンケートをして昨年と比較し，現状を把握する。そして，それぞれの現状や成長過程にあった楽譜を活用する授業を実施し，音楽への関心が高まったかアンケートをとって，検証してみた。

「楽譜を読もう」の取り組み

1 年生は，昨年に引き続き，楽譜を読む授業を年度当初に行う（詳細は昨年度のものを参照）。まずは，小学校 2 年生の学習「音譜の読み方」から遡って復習する。最終的には，昨年度の 3 年生と同じく，簡単なリズムを聞いて記譜できるところまでを目標とし，テストでどの程度理解できたか，確認することにした（詳細は昨年度の紀要を参照）。2，3 年生は教科書の曲や文化祭の合唱練習で，楽譜を読みながらどのように曲に合った表現を付けたらよいかを考えさせた。そして，1，2 年生は楽譜が読めるようになったことで音楽に対する意識の変化があったかどうか，3 年生は楽譜を活用してどう表現に活かすことができたか調査してみた。

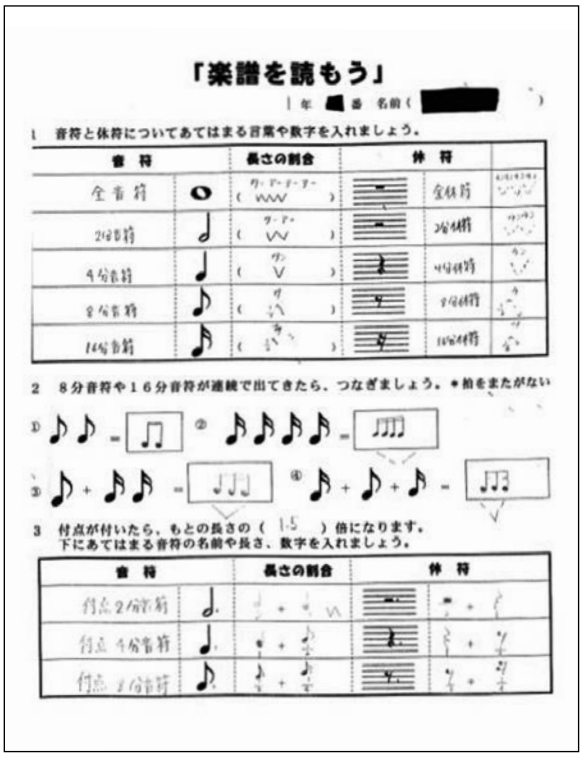


図 9　1 年生の最初は小学校の内容から復習

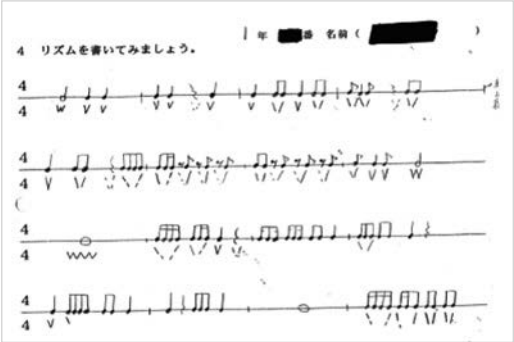


図 10　リズムを聞いて記譜

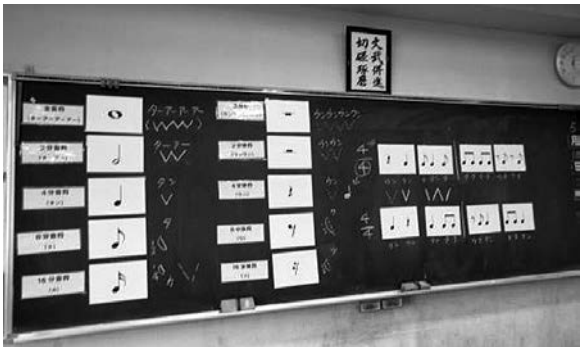


写真 1　毎時間音譜の読み方を掲示

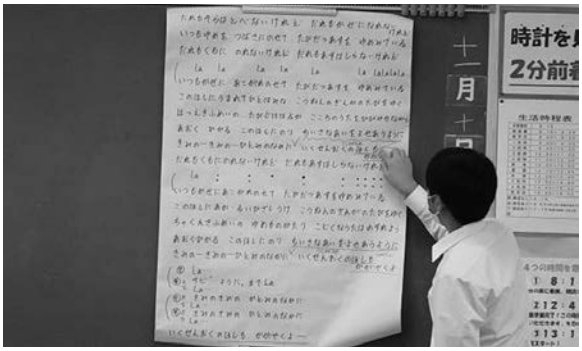


写真 4　楽曲分析をしてクラスに説明する指揮者達

写真 2　友達の創作したリズムを見ながら叩いてみる

写真 4　縦割り合唱で先輩が楽譜を見ながらアドバイス

写真 3　創作したリズムをリレーしてつなげていく

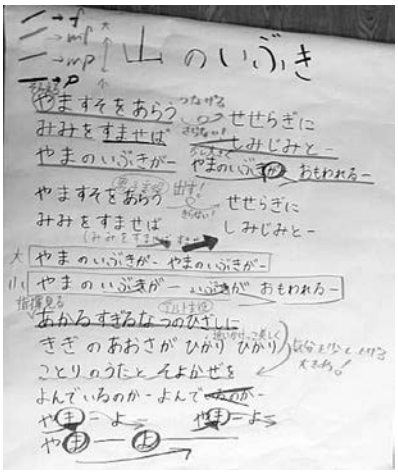
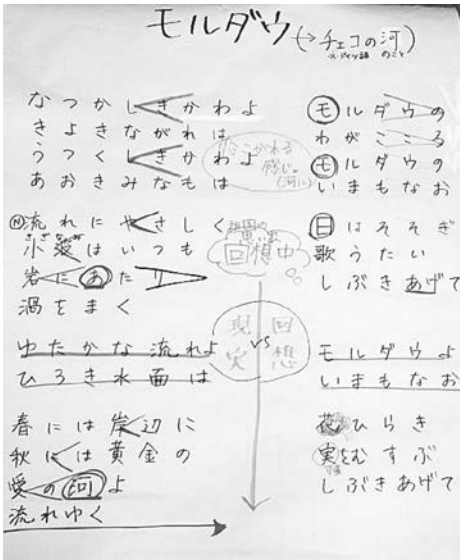


写真 5(1)　合唱曲の曲想を練る(3 年生)



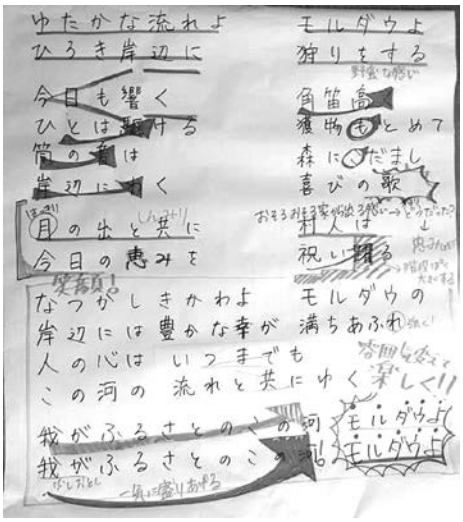


写真 5-(2)　合唱曲の曲想を練る（3 年生）

3. 結果と考察

1 年生は，昨年同様小学校低学年の学習に遡り，声と手拍子で音の長さを把握することから始めた。その結果，リスニングテスト（4 分の 4 拍子 2 小節分のリズムを聞き取り，書く）では，正答率は 90％を越えた。したがって，ほとんどの生徒が音符の書き方，長さ，楽譜の書き方を理解したことがわかった（**図 11**）。また，アンケートではもともと楽譜が読める生徒も含め，90％は楽譜を読むことができるようになったと回答した。楽譜を読む学習は役に立ったかという質問には，61％が役に立った，39％が役に立たなかったと回答した（**図 12**）。

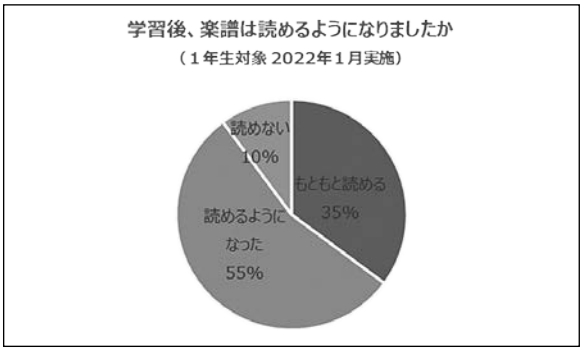


図 11　2021 年度入学生徒対象 128/137 名
2022 年 1 月実施

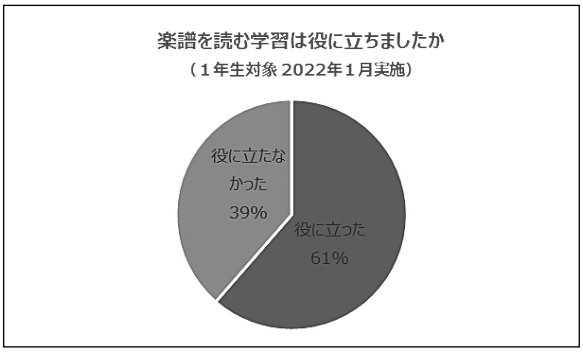
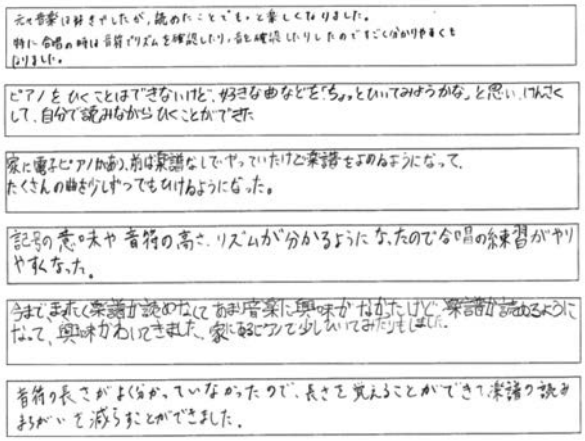


図 12　2021 年度入学生徒対象 128/137 名
2022 年 1 月実施

また，楽譜を読むことでどういうことに役に立ったか聞いてみた。

感想 1（1 年生）


元々音楽は好きでしたが，読めたことでもっと楽しくなりました。
特に合唱の時は音符やリズムを確認したり，音と確認したりしたのですごく分かりやすくもなりました。

ピアノをひくことはできないけど，好きな曲などを「ちょっと」といってみようかな，と思い，けんさくして，自分で読みながらひくことができた

家に電子ピアノがあり，前は楽譜なしでやっていたけど楽譜をよめるようになって，たくさんの曲を少しずつでもひけるようになった。

記号の意味や音符の高さ，リズムが分かるようになったので合唱の練習がやりやすくなった。

今までまったく楽譜が読めなくてあまり音楽に興味がなかったけど，楽譜が読めるようになって，興味がわいてきました。家にある電子ピアノで少しひいてみたりもしました。

音符の長さがよくわかっていなかったので，長さを覚えることができて，楽譜の読みまちがいを減らすことができました。

2 年生は，昨年楽譜を読む学習をしているので，どの程度また，強弱記号や調を読み取ることにより，「なぜここにこの記号がついているのか」「なぜこの調が使われているのか」考え，作曲者の意図を踏まえた上で自分たちで曲想を考えて表現するよう声をかけてきた。鑑賞でも

楽譜から作曲者の意図を読み取るよう意識できた。その結果，入学時より楽譜を読めるようになった生徒は63%となり，もともと読める生徒と合わせて93%が楽譜を読めるようになった。

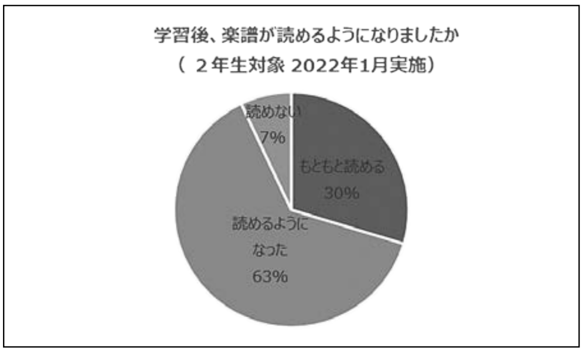


図 13 2021 年度入学生徒対象 126/138 名
2022 年 1 月実施

また，楽譜を読む学習が「役に立った」と感じた生徒が89%，役に立たなかったと感じた生徒は11%と，1 年生より役に立ったと感じた生徒が多かった。ちなみに，この結果は昨年度の 3 年生の 74%を大幅に上まわった。

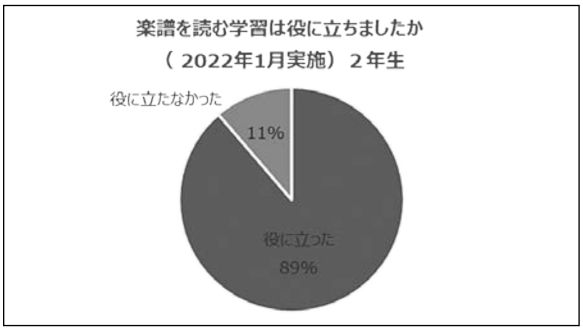
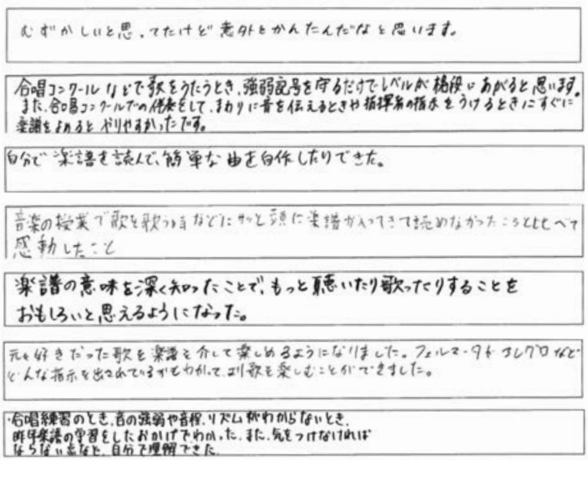


図 14　2021 年度入学生徒対象 126/138 名
2022 年 1 月実施

感想 2（2 年生）


むずかしいと思ってたけど意外とかんたんだなと思います。

合唱コンクールなどで歌をうたうとき，強弱記号を守るだけでレベルが格段にあがると思います。また，合唱コンクールでの係をして，まわりに音を伝えるときや指揮者の指示をうけるときにすぐに楽譜をよめるとやりやすかったです。

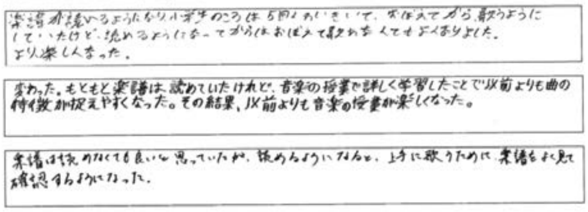
自分で楽譜を読んで，簡単な曲を自作したりできた。

音楽の授業で歌を歌う時などにサッと頭に楽譜が入ってきて読めなかったころとくらべて感動したこと

楽譜の意味を深く知ったことで，もっと聴いたり歌ったりすることをおもしろいと思えるようになった。

元々好きだった歌を楽譜を介して楽しめるようになりました。フェルマータやアレグロなどどんな指示を出されているかもわかって，より歌を楽しむことができました。

・合唱練習のとき，音の強弱や音程，リズムがわからないとき，昨年楽譜の学習をしたおかげでわかった。また，気をつけなければならない点など，自分で理解できた。

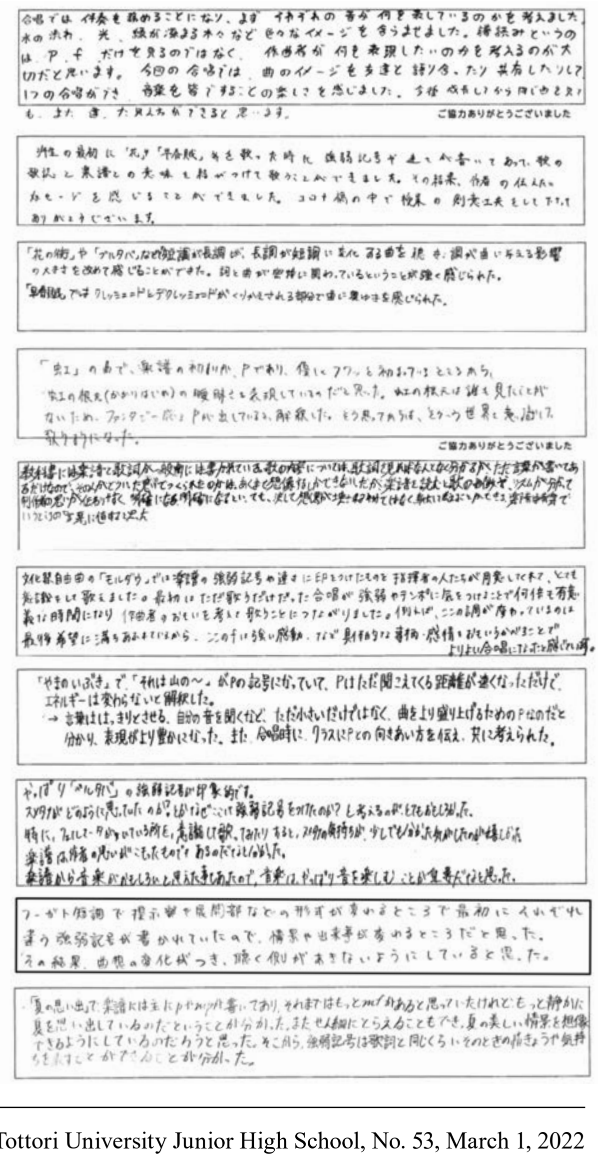

楽譜が読めるようになり小学生のころは5回ぐらいきいて，おぼえてから歌うようにしていたけど，読めるようになってからはおぼえて歌わなくてもよくなりました。より楽しくなった。

変わった。もともと楽譜は読めていたけれど，音楽の授業で詳しく学習したことで以前よりも曲の特徴が捉えやすくなった。その結果，以前よりも音楽の授業が楽しくなった。

楽譜は読めなくても良いと思っていたが，読めるようになると，上手に歌うために楽譜をよく見て確認するようになった。

3 年生は，音譜を読む学習を改めてはしていないが，楽譜に注目させながらピアノで弾いて転調に気付かせたり，テンポに注目させたりしてみた。そして，「なぜここにこの記号がついているのか」「なぜこの調が使われているのか」など，作曲者の意図について考え，自分たちで曲想を考えて表現するよう 2 年間声をかけてきた。その結果，楽譜を読んで表現を工夫しようという意識はどの程度芽生え，生徒達が楽譜を読むことをどう感じているか聞いてみた。

感想 3（3 年生）


合唱では伴奏を務めることになり，まずそれぞれの音が何を表しているのかを考えました。水の流れ，光，緑が染まる木々など色々なイメージを膨らませました。譜読みというのはP，fだけを見るのではなく，作曲者が何を表現したいのかを考えるのが大切だと思います。今回の合唱では，曲のイメージを友達と語り合ったり共有したりして1つの合唱ができ，音楽を皆ですることの楽しさを感じました。

ご協力ありがとうございました

「花」「手紙」などを歌った時に強弱記号が書いてあって，歌の歌詞と楽譜との意味を結びつけて歌うことができました。その結果，作者の伝えたい気持ちを感じることができました。コロナ禍の中で授業の創意工夫をして下さりありがとうございます。

「花の街」や「ブルタバ」など短調が長調に，長調が短調に変化する曲を聴き，調が曲に与える影響の大きさを改めて感じることができた。詞と曲が密接に関わっているということが強く感じられた。
「早春賦」ではクレッシェンドとデクレッシェンドがくり返される部分で曲に奥ゆきを感じられた。

「虹」の曲で，楽譜の初めがPであり，優しくフワッと始まっているところから，虹の根元の曖昧さを表現しているのだと思った。虹の根元は誰も見たことがないため，ファンタジー感をPが出していると解釈した。そう思ってから，そういう世界を意識して歌うようになった。

ご協力ありがとうございました

教科書には楽譜と歌詞が載っている。歌の内容については歌詞を見れば分かるが，ただ言葉が書いてあるだけなので，そのメロディがどう表現されるのかは想像しかできなかった。楽譜を読むと歌の強弱やリズムが分かって，作曲者の思いが伝わってくる。

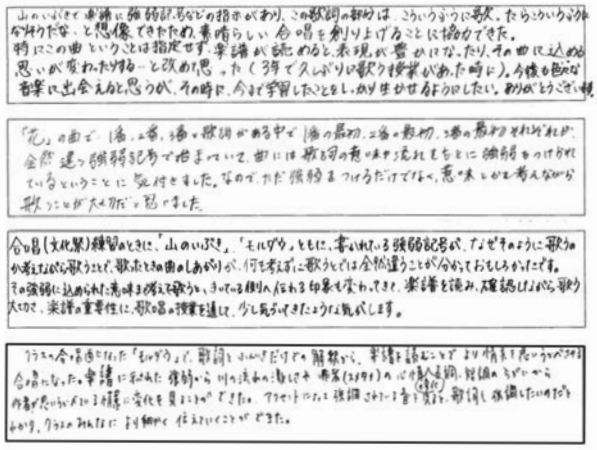
文化祭自由曲の「モルダウ」では楽譜の強弱記号や速さに印をつけたものを指揮者の人たちが用意してくれて，とても意識をして歌えました。最初はただ歌うだけだった合唱が強弱やテンポに気をつけることで何倍も有意義な時間になり，作曲者のおもいを考えて歌うことにつながりました。例えば，ここの調が変わっているのは希望に満ちあふれているから，ここのfは強い感動，など具体的な事柄・感情をおもいうかべることでよりよい合唱になったと感じました。

「やまのいぶき」で，「それは山の～」がPの記号になっていて，Pはただ聞こえてくる距離が遠くなっただけで，エネルギーは変わらないと解釈した。
→言葉ははっきりとさせる，自分の音を聞くなど，ただ小さいだけではなく，曲をより盛り上げるためのPなのだと分かり，表現がより豊かになった。また，合唱時に，クラスにPとの向きあい方を伝え，共に考えられた。

やっぱり「モルダウ」の強弱記号が印象的です。
スメタナがどのように思っていたのか？とかなぜここに強弱記号をつけたのか？と考えるのがとてもおもしろかった。
特に，フォルテッシモがかかっている所を，意識して歌ってみたりすると，スメタナの気持ちが，少しでも分かった気がしたのが嬉しかった。
楽譜は作者の思いがこもったものであるのだなと感じた。
楽譜から音楽がおもしろいと思えた事もあったので，音楽は，やっぱり音を楽しむことが重要だなと思った。

フーガト短調で提示部や展開部などの形式が変わるところで最初にそれぞれ違う強弱記号が書かれていたので，情景や出来事が変わるところだと思った。その結果，曲想の変化がつき，聴く側があきないようにしていると思った。

・「夏の思い出」で楽譜には主にpやmpが書いてあり，それまではもっとmfかあると思っていたけれど，もっと静かに夏を思い出しているのだということが分かった。また，せん細にとらえることもでき，夏の美しい情景を想像できるようにしているのだろうと思った。そこから，強弱記号は歌詞と同じくらいそのときの情景や気持ちを表すことができることが分かった。



上に挙げたのは1部の生徒であるが，明らかに2年生より書いてある行数も増え，たくさんの生徒が楽譜を読んで解釈していくことで「深い学び」を楽しんでいることが伝わってきた。2年続けて意識付けしてきたことも，成長段階も関係あるかと思うが，音楽の楽しみ方が1，2年生より明らかに深いものになっていた。さらに，意識調査の変化を比べてみた（**図 15**）。

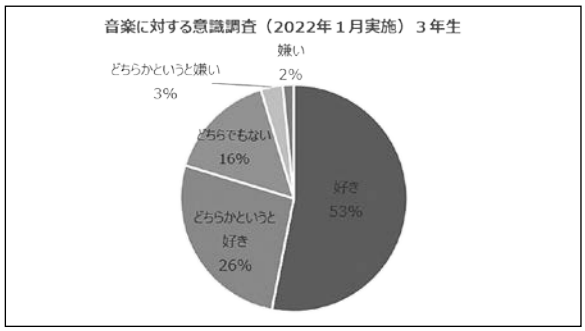


図 15　2019 年度入学対象 128/135 名
2022 年 1 月実施

意識調査の結果を見ると，3年生は好き（33%→ 45%→ 53%），どちらかというと好き（26%→ 29%→ 26%），どちらでもない（26%→ 22%→ 16%），どちらかというと嫌い→（10%→ 2%→ 3%），嫌い（5%→ 2%→ 3%）と変化し（冒頭の「1. はじめに」を参照），現状としては学年が上がるごとに音楽が好きになったことがわかった。

まとめてみると，「楽譜を読む」学習が役に立ったと感じているのは，1年生61%，2年生89%（ちなみに昨年の3年生74%）で，学年が上がるごとに楽譜を読むことで役に立ったと感じていることがわかった。

1年生は，文化祭の合唱曲が2，3年生と違って短く，1曲しかなかったため，音取りが簡単で教師主導で進めすぎてしまったことが原因の一つかと反省している。来年度は，自分たちで楽譜を読み，音取りをしていくよう仕組んでいきたい。また，冬休み明けに鑑賞の授業に入るため，楽譜に触れる機会も増え，終了してからアンケートをとると変化が表れるのではないかと考えられる。

2年生は，入学当初に楽譜を読む学習をして積み上げが進んだ結果，89%もの生徒が学習が役に立ったと感じており、その知識をもとに学習の中で読み取りを深め，合唱練習などを通して意見を言い合い，表現を高めていったと考えられる（やりくり）。

3年生は，年度当初の，コロナ感染が少し収まってソーシャルディスタンスを保ちながら歌の学習ができると判断した時に，「心のうた」を最優先にして学習した。日本の歌の美しさや素晴らしさを卒業までに絶対知っておいてほしかったからである。そのため，音符を読む学習時間は確保できなかったが，日本の歌の美しい歌詞や調，速さ，絶妙な記号の用い方や伴奏などに着目させ，楽譜を読み解き，説明を加えながら授業を進めていった。また，「なぜこういう音符が使われているのだろう？」「なぜこの拍子が使われているのだろう？」「なんでここからテンポが変わっているのだろう？「なぜここから調が変化しているのだろう？」など，たくさんの「なぜ？」を問いかけた。3年生の成長段階としても，いろいろなものの見方や考え方が発達し，本校の目指している「やりくり」が各教科で鍛えられていたので，自分たちでどんどん考えを深めていく力が身に付いていった。文化祭のクラス合唱では，自分たちで音取りをし，色づけをして授業に臨み，さらに教員が楽譜の読み取りを深めるようなヒントを出して，それをもとにまた自分たちで意見交換して創り上げる合唱となった。

結論として，音楽が好きになった生徒が増えた理由としては，感想にも「楽譜が読めるようになり，おもしろくなった。」「楽譜を読めるようになることで，作曲者からのメッセージを

受け取り，深く背景を探るようになった。」など，多数挙がっているように，「楽譜を読むことで曲への理解が深まり，表現が豊かになって面白さが増した。」と感じる生徒が増えたことも大いに関係しているといえる。それは，学習指導要領の目標である「楽譜を読む（知覚）」は，感受に大きな影響を与え，「音楽を愛好する心情を育むとともに，音楽に対する感性を豊かにし，音楽に親しんでいく態度を養い，豊かな情操を培う」ことにつながったといえよう。

しかし，課題もある。1年生の感じた「役に立たない」が1月時点で39パーセントもいた（昨年度の3年生は26%）。昨年度の考察で，「学習したことを普段の授業で生かし切れなかったという課題も残された」と記述したが，今年も課題として残ってしまった。「役に立たない」という意識があると，「せっかく学習しても役に立たないから学習しても意味がない。」という意識につながってしまう。何故，役に立たないと感じたのか理由を読むと，「学習しても生かす場面がなかった。」という理由が多く，次に「楽譜が読めなかった。」という理由が挙げられた。また，そう答えた生徒は，「どちらかというと音楽は嫌い」「嫌い」という生徒が多かった。嫌いだからもともと学習に意欲的に取り組めなかったのか，わからないから嫌いになったのかは不明だが，もっとわかりやすく生徒に「できた。」「わかった。」「面白い。」と思ってもらえるような授業を工夫する必要がある。また，前述したが，1年生は初めてだと思って，合唱の音取りなどを教員が手助けしすぎたということも考えられる。残りの授業で，楽譜の読み取りを意識した授業を工夫していきたい。また，2年生の中には，「もともと読めていたから，特に何も変わっていない。」という回答がいくつかあった。来年3年生になったら，もっと深く読み取っていくような，手応えのある授業を展開していきたい。そのためには，授業者自身が，その学習を「面白い。」と心から思えるかどうかが大切だと思う。「面白い。」と感じるには，今更ではあるが，教材研究が欠かせない。私は，生徒に「教科書にないエピソード」をいかにたくさん語れるかを自分への課題にしている。エピソードを語るには，自分がそれだけたくさんの資料を読んでないといけないからだ。そして，それが生徒の「やりくり」する材料となり，たくさんの個性的で豊かな発想を生み出す素になると信じ，これからも研鑽を積んでいきたい。

文献

文部科学省　中学校学習指導要領（平成29年告示）解説より
＊書籍を参考にしてアンケート調査実施
石村光資郎＋石村友二郎著　石村貞夫　監（2014）東京図書乙論・修論のためのアンケート調査と統計処理